季刊 @h [アット・エイチ]

vol. 50

SUMMER 2016

特集

函館の『国際化』を考える。

藤巻秀樹／田中慶子
河村悦郎／アルーン・ヴァガーイ
アダム・スミス×フォードル・デルカーチ
柳谷瑞恵／朱 妍卉

中野由貴
〈連載〉
中川大介
西野鷹志
庄司 証
米田哲平／小宮伸二
夏井俊介／近藤 緑
押野友美／ふくだたくま
中村ひでのり

TAKE FREE

@h 50 季刊［アット・エイチ］

2016年夏号（巻50号） 2016年6月20日発行（季刊）
発行人・池田 誠 編集人・中村ひでのり

HIF
（一財）北海道国際交流センター（HIF）
040-0054 函館市元町14-1 TEL. 0138-224-0770 FAX. 0138-224-0660
E-mail volut@hifor.jp http://www.hifor.jp/volut/

The Beetle Dune

誰にも似ていない、自分だけのスタイル。
都市から脱け出す The Beetle Dune 登場。

自由にどこか遠くへ出かけたくなるクロス・スタイルを身につけたThe Beetle Dune.
砂丘をイメージした専用カラーの
サンドストームイエローメタリックをまとい、
いつものストリートを走り出せば、誰もが振り返る。
心はどこまでも加速する。

The Beetle Dune 全国限定500台 車両本体価格（消費税込） ¥3,219,000

●掲載のメーカー希望小売価格は2015年4月1日現在の税率に基づく消費税込価格であり、2015年4月1日以降に購入された場合に適用されます。●表示の価格は2016年2月現在の車両本体価格（消費税込み）であり、標準工具一式が含まれていますが、オプション装備価格、保険料、税金（消費税を除く）、登録に伴う諸経費は含まれておりません。リサイクル料金が別途必要となります。●ボディカラーは印刷インクの性質上、実際の色とは異なって見える場合があります。●本仕様・装備・諸元・価格は予告なく変更される場合があります。●掲載の写真は、日本で販売される車両とは仕様が異なる場合があります。●詳しくはVolkswagen正規ディーラーにお問合せください。

フォルクスワーゲン正規ディーラー
Volkswagen 函館
株式会社 北海道ブブ
北海道北斗市追分 1-12-18 〒049-0101
TEL. (0138) 48-2288 FAX (0138) 48-2285

Volkswagen

C O N T E N T S

季刊 @h [アット・エイチ]
vol. 50
SUMMER 2016

特集 函館の『国際化』を考える。

明日の「共住」のカタチを問う p6
北海道教育大学函館校・藤巻秀樹さんに聞く

日本語教育で在留外国人を支える p10
函館日本語研究会（JTS）会長・田中慶子さんに聞く

グローバル化への適応としての外国人雇用 p12
（有）河村工業　専務取締役・河村悦郎さん

外国人が暮らしやすい地域とは p13
佐々木ヨガアシュラム主宰・アルーン・ヴァガーイさん

座・談・会 p14
アダム・スミス×フョードル・デルカーチ

さらに外国人客を呼び込むために p18
函館市観光部次長・柳谷瑞恵さんに聞く

朱妍卉さんの函館生活 p20

昔の子ども、今どきの子ども
地域で作った"あの頃"の運動会 p21
庄司 証

人と水と空と森の話
街なかの水 p22
中川大介

PERSON @h 新・函館人
中野由貴 FMいるか・パーソナリティ p25

連載 小宮伸二／近藤 緑／米田哲平／夏井俊介
ふくだたくま／押野友美／中村ひでのり p26

[ライカはゆく] 特別寄稿／第2話
武者行列 p30
西野鷹志／文・写真

HIF インフォメーション INFORMATION p33

本誌設置場所
FROM EDITOR・奥付 p34

FROM EDITOR

1979年。世界では、アメリカ合衆国と中国の国交が樹立、イラン革命が起き、旧ソ連のアフガニスタン侵攻が始まった。そしてマザー・テレサがノーベル平和賞を受賞したのもこの年だ。

70年代から80年代へ、社会が大きく変化していった時代の真っ只中、小さな一歩ではあるが、HIFの留学生ホームステイプログラムがスタートしたのも1979年夏のこと。今でこそ、函館に外国人がいる風景はめずらしいことではないが、当時はまだまだ異文化に触れる機会の少なかった時代。言葉も習慣も異なる人たちが自分の家にやって来て、2週間も一緒に暮らすのだから、てんやわんやだったに違いない。

あれから30数年。近頃の外国人観光客の急激な増加は周知のとおりだが、道南に定住する外国人の数も少しづつではあるが増えている。この先の日本の少子高齢化社会を見据え、「働き手」としての外国人の受け入れを検討すべきだという声も聞こえてくる。「Think Globally、Act Locally—地球的な視点で考え、地域で行動する—」これは、私たちが早急に考えなければいけないことだ。今号は、さまざまな立場の方々から、「函館の国際化を考える」というテーマでお話をうかがった。函館ばかりではなく、日本の地域社会のこれからを考えるきっかけになれば、という思いを込めて。

HIF事務局　池田　誠

cover illustration/Takihana Yasukazu　cover design/Nakamura Hidenori

※本誌記事、写真、レイアウトの無断転載を禁じます。

森へ、湖へ。

さわやかな朝の空気と小鳥たちのさえずり
可憐な野花や小動物との出会い、
湖面を渡る風。
[ネイチャーガイド&遊覧船]は、
大沼に精通した経験豊富なガイドが
みなさまに"森の愉しみ"をご案内します。
その後は、島巡り遊覧船で
リフレッシュしていただきます。

NATURE GUIDE TOUR

【ネイチャーガイド&遊覧船プラン】
出発時間／1日2回▶13:00▶15:00（10分前集合）
森の散策時間60分＋遊覧船30分
散策コース／大沼・小沼周辺をご案内します
料金／大人3500円・小学生2500円（幼児不可）
希望日／前日の16:00まで受付いたします
催行人数／2名〜4名まで（1名様の場合はご相談ください）
ご予約と集合場所／大沼合同遊船株式会社（公園広場内）
☎0138-67-2229
ガイド／小泉真（CST,TPチーフカメラマン）

大沼合同遊船　株式会社
〒041-1354　北海道亀田郡七飯町大沼1023-1
TEL. 0138-67-2229　FAX.0138-67-3997　E-mail:yusen@onuma-park.com
http://www.onuma-park.com

特集

函館の『国際化』を考える。

日本にやってくる外国人観光客が大きく増えた。
函館でも街なかや電車で外国語が飛びかう光景が日常になった。
この街に暮らす外国人も少しずつ増えている。
人口減少がこのまま続けば、
外国人を『働き手』として受け入れる必要がある、
という声も聞こえる。

目の前の現実は、わたしたちを置いてけぼりにして、先へ先へと進んでゆく。
でも、かつて多くの外国人が暮らした函館が、
いまふたたび上手に異文化を受け入れ、折り合っていけるだろうか。
『国際化』とは何であり、なぜ必要なのだろう。
函館は『国際都市』と言えるのだろうか。
古くて新しいこの問いに、あらためて向き合ってみたい。

当ホテルは、
トリップアドバイザーの
「朝食のおいしいホテル 2016」にて
日本全国第4位に選ばれました。

函館の上質な旅を演出します。

函館国際ホテル

HAKODATE KOKUSAI HOTEL

●宿泊のご予約
0138-23-0591

●ブライダルのお問合せ
0138-23-6161

〒040－0064　北海道函館市大手町5-10　http://www.hakodate-kokusai.jp

特集 函館の『国際化』を考える。

明日の「共住」のカタチを問う

「国際化を考えるプロジェクト」の目指すもの―北海道教育大学函館校・藤巻秀樹さんに聞く

聞き手・中川大介（人と水研究会）

北海道教育大学函館校の教授として「多文化共生」について教える藤巻秀樹さんは、昨年秋から学生たちと「外国人の目線で函館の国際化を考えるプロジェクト」を進めている。在留外国人に函館の住みやすさや交流の場の有無などを尋ねるものだが、これまでの回答者の7割が「函館を国際的な街とは感じない」と答えたという、市民にはいささかショッキングな結果が出ている。新聞記者として国内の外国人労働の現場を数多く歩き、駐在した欧州でも移民問題を取材した藤巻さんにプロジェクトの狙いなどを聞くと、深刻な人口減少や都市としての活力低下に直面する函館が考えるべき課題が見えてきた。

――プロジェクトとはどんなものですか。

本校が昨年度始めた実践学習「地域プロジェクト」の一つです。私の所属する国際協働グループでは「多文化共生」をテーマに、昨年11月から国際協働グループの学生8人が在留外国人にアンケートとインタビューを重ねており、既に50人ほど調査しました。函館は外国人の集住地域ではありませんが、深刻な人口減という地方都市に共通する大きな問題を抱えている。学生たちには外国人と接することで「外の目線」から函館を見ることを学び、この人口減少について考えてほしいと考えています。

――調査に答えた外国人の7割が「函館を国際的な街と感じない」と答えたという現実は何を物語るでしょう。

函館はかつて国際都市でした。当時の歴史を伝える建物が残り、国際都市の雰囲気はありますが、それは過去の話。在留外国人は街に活気やにぎわいがなく、観光地以外は夜になると真っ暗で、「寂しい」と感じています。まず活気のある都市にすることが、国際都市への道ではないでしょうか。それには若者の雇用を創り出すことです。函館には公立はこだて未来大という優れたＩＴ技術者を育てる機関がありますが、卒業生の地元定着率は1割未満と聞きます。大都市とは離れていても成り立つＩＴ産業を集積させて、若者が地元で働けるようにすることが都市として活性化する道と思います。

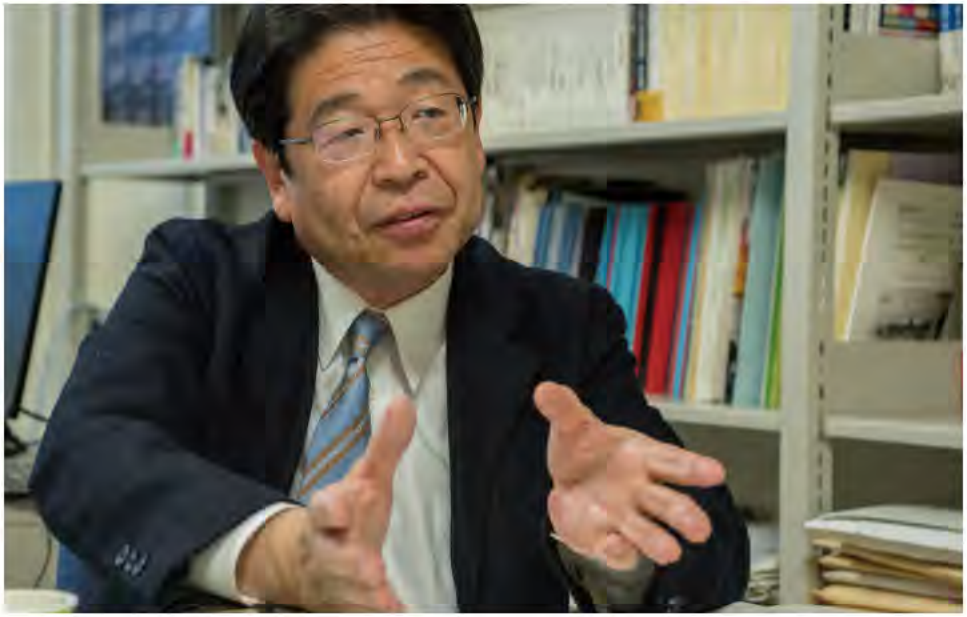
――在留外国人は、函館のどんな点に不便を感じているのでしょう。

バスの本数が少ないなど公共交通機関が不便で、英語の案内もない。言葉の問題で病院での治療や役場での手続きが不安だ―といった声が出ています。函館市は英語版の生活ガイドも作っていますが、存在があまり伝わっていない。外国人は日本の文化を知りたい、自国の文化を発信したいと思っているのに、国際交流のイベントも内輪の集まりに終わり、外国人も日本人も一般市民は来ていない例がある。告知方法を一考すべきでしょう。教育の問題も出ており、インターナショナルスクールがないので子供が就学時期になると困る、という声もあります。

総じて函館の人はフレンドリーだが、オープンではない、と感じる外国人が多いようです。英語ができる人が少なく、外国人に慣れていない。頼めばやってくれるが、積極的に声はかけてこない、と。プロジェクトではこうした声をまとめて、夏ごろには外国人が住みやすい街とするために採るべき方策を函館市に提言する予定です。私は、まず外国人住民の声を直接聴く「多文化共生」円卓会議を設けてはどうかと思っています。外国人にもまちづくりに参加してもらうことで、停滞気味のこの地域が活気づく可能性があると考えています。

――函館では人口が毎年３千人も減る一方で在留外国人が増え、昨年末現在では８６６人と、旧４町村と合併した２００４年以降で最多でした。日本人と外国人の「共住」について、真剣に考えるべき時代に来ているのでしょうか。

そう思います。国内全体でも人口減が止まらない一方で、在留



外国人が増え、昨年末で約223万人と、前年末より5・2％増えて過去最多です。自治体人口に占める在留外国人の比率は、群馬県大泉町では16％にもなります。増加が著しい地域は主に日系ブラジル人などの工場労働者が集住する製造業の街です。

日本では1980年代後半のバブル期、パキスタンやバングラディシュ、イランなどから外国人労働者が数多く流入しました。だが不法就労も多く、政府がこれらの人びとを帰国させ、代わりに始めたのが就労に制限のない日系人の在留資格「定住者」の創設（1990年）、そして外国人の技能実習制度（93年）です。2000年代に入ると日本語学校や大学などの留学生が増えました。日本は資格外活動としてアルバイトを認めているので、働く留学生も実質的に外国人労働者です。

水産業、農業、介護など日本人労働者が集まりにくい業種で外国人の就労が広がっています。記者時代に愛媛県今治市で取材した特産のタオル縫製工場では、日本人は主婦のパートしかおらず、若い女性はすべて中国人の技能実習生でした。日本人が消えた穴を外国人が埋める事例は農山村にも数多くあります。

――函館では最近、ネパール料理店を営むネパール人が増えたと聞きます。

ベトナム人とともに全国的に増えています。ベトナムは日系企業が進出し、日本で働きたい人が増えているのですが、ネパールについてはよく分かりません。日本なら働ける、という口コミが広がっているのでしょうか。外国料理の調理師は技能ビザが下りるのです。函館では在留外国人比率が0・3％程度と低く、製造業も少ないので外国人労働者が急増する可能性はあまりない。それでも外国人は増えるでしょう。居酒屋などのサービス業や建設業にも広がっている。「共住」の在り方を真剣に考えるべきだと思うのです。

外国人労働者受け入れには二つの側面があります。一つは、不足する労働力をカバーしてもらうこと。もう一つは、高度な技能や知識を持つ人材の受け入れによる日本社会の活性化です。そうした人材を受け入れる上では日本的な終身雇用や年功序列の人事制度、長時間労働によるワークライフバランスの悪さなどがネック。日本社会が変わって行く必要があると考えています。

――国の政策も変化が必要でしょうか。

外国人労働者をめぐる日本の政策は極めて不十分です。「単純労働者は受け入れない」というタテマエの陰で実習生制度などを設けて安価な労働力として使い、弥縫策に終始してきた。外国人やその子弟にきちんと日本語を教え、社会に組み入れる総合的な政策がないのです。ドイツも日本と同じように出生率の低い国ですが、2005年に「移民国家宣言」をして、移民に語学教育の機会を提供するなどして社会に組み入れる「社会統合政策」を採ってきました。

国家レベルで政策が変わるには時間がかかりますが、函館市は「国際観光都市」を掲げているのですから、先取りして「共住」に取り組んではどうでしょう。インターナショナルスクールをつくるなど生活環境を整えることで、外国人を呼び込み、まちづくりに彼らの知恵を借りて全国に発信するのです。これだけ人口が減っていることを直視して、危機感を持って取り組むべきです。

函館には現在でも、いろいろな国や地域から来た外国人が住んでいます。まちづくりは「よそ者」「バカ者」「若者」の存在が大事とよく言われますが、函館では「よそ者」、しかも日本とは言語や文化、生活習慣などが大きく異なっていて、それゆえに斬新でユニークなさまざまな外国人の視点をまちづくりに取り入れることが可能なのです。かつて多くの外国人や外国の文化を受け入れて、日本屈指の国際都市として勢いのあった時代の函館人が持っていた進取の気概をもって、彼らの意見をまちづくりに活かすべきです。

PROFILE

藤巻秀樹／1955年、山梨県生まれ。東京大学文学部仏文科を卒業後、日本経済新聞に入社。パリ支局長、経済解説部次長、編集委員などを歴任して2014年に退職し、同年から現職。著書に「『移民列島』ニッポン」（藤原書店、2012年）など。函館市在住。

【外国人の目線で函館の国際化を考えるプロジェクト】

●北海道教育大学函館校が2015年度に始めた地域の問題を考えるフィールドワーク型授業「地域プロジェクト」の一つ。学生が「記者」となって、函館に住む外国人に書面によるアンケートと面談によるインタビューで「函館で不便・不満を感じること」「函館の魅力は」「函館には活気があるか」「函館は国際的な街か」などを尋ね、国際化へ向けたユニークなアイデアを募る、という取り組み。調査結果をもとに、函館が真の国際都市になるための提言書をまとめ、函館市などの行政機関に提出する計画だ。外国人100人への調査を目標に昨年11月にスタートし、中国、米国、英国、韓国、マレーシア、ベトナムなどさまざまな国籍を持つ人に話を聞いており、今年7月に中間報告を発表する。

在留外国人にインタビューする北海道教育大函館校の学生

特集 函館の『国際化』を考える。

日本語教育で在留外国人を支える

27年間の活動で見えてきたもの―函館日本語研究会（JTS）会長・田中慶子さんに聞く

聞き手・池田誠（HIF）

今から27年前、北海道国際交流センター（HIF）で行われた日本語教師養成講座のメンバーからスタートした函館日本語研究会（JTS）。田中慶子さんは創設からのメンバーで、3代目の会長だ。「日本語教育のレベルアップを」と、かれこれ四半世紀、組織を引っ張ってきた。50歳になってから英検1級を取得し、更に自己研鑽へと始めた日本語教育が、今は多くの在留外国人の支えになっている。

JTSが本格的に函館在住の外国人の支援を始めたのが、約20年前に始まった日本語サロンだ。函館YWCAを拠点に毎月第1、3土曜日に開いてきた。外国人1人に対して、1人以上の日本語ボランティアが対応して話を聞き、皆でのしりとりや文化紹介などの交流の時間も設ける。日本に来て不安だらけの留学生の家族や、日本語に不安のある外国人をサポートする。「日本の生活や子どもの教育、さらには離婚の相談まで受けることもあって、サロンの後、外国人が家を訪ねてくることもしばしばでした」

ただ、ボランティアが中心のメンバーだけでは、生活支援の制度などについてはわからないことも多い。行政や支援団体の力を借りられる今は、生活の問題はそちらに任せて、JTSは日本語教育に専念する。日本語教室は初級からクラス別に運営するが、「中上級クラスの受講生が年々増えており、もっと日本語を学んで地域の役に立ちたいと思う外国人たちのために、さらにきめ細かいクラス分けをしての指導が課題です」という。

もう一つの課題は、留学生などの子弟の学習支援だ。留学生の子弟は日本の義務教育を受けるが、日本語がわからないために授業についてゆけないという。本当なら個別授業で日本語を学んでほしいが、学校現場でそんな支援体制はなかなか組めない。函館はまだそれほど外国人の子弟は多くはないが、JTSとして「支援をしたい思いは強い」と語る。

日本語サロンには、中国、台湾、韓国、インドネシア、バングラディシュ、ベトナム、マレーシア、アメリカ、カナダ、イタリア、アイルランド、フィンランド、ノルウェーなど、本当に多くの国からの参加者がいる。交流行事として行う五稜郭公園での花見、ポットラックパーティー、日本語スピーチ発表会などを入れると、延べ300人を超えている。発足当時から考えると、間違いなく日本語を学ぶ外国人が多くなった。

北海道新幹線が開業して、道南では外国人が増えてゆく可能性がある。「ワンストップでさまざまな相談を受ける場所があって、日本語教育ならJTS、生活相談なら専門のNPO、義務教育なら行政機関―というように、スムーズに対応できるシステムが作れないかと思います。それには自分たちの活動の充実だけでなく、他の団体や組織との連携が必要。まだまだやるべきことは多いし、もっと多くの人に関わってもらえるように活動を続けたい」。こう話す田中さんの言葉は、着実な活動にしっかりと裏付けられているように思えた。

PROFILE

田中慶子／函館生まれ。北海道教育大学函館校を卒業後、中学校の英語教師、大学などの非常勤講師を経て現在に至る。英検1級。英検面接委員を務めた。著書に日本語学論説資料「外国人への日本語教育ー改定常用漢字をめぐって」（論説資料保存会、2011年）。

【函館日本語研究会（JTS）】

●函館に住む外国人への日本語指導法などを勉強するために 1989年に設立された。外国人の日本語支援のボランティア活動と共に「函館市日本語教室」の講師派遣も行っている。大学などで日本語を教える専門家、これから教えるために勉強している人、日本語ボランティアとして活動する人など50名で構成。

【日本語サロン】※日本語支援（個人・全体交流）
毎週土曜日／10:45～12:15
【日本語クラス】※中上級者向け日本語指導
毎週木曜日／13:30～15:00
【会員のための学習会】
毎月第4土曜日／13:30～15:30
【函館市日本語教室】※5月～3月 各クラス33回の授業
月曜日／18:45～20:00　2クラス（入門・初級）
木曜日／9:45～11:00　2クラス（入門・初級読み書き）
11:15～12:30　1クラス（初級）

活動拠点：函館市青年センター・入会金2000円、年会費2000円
連絡先：事務局（入江）mayumistral@yahoo.co.jp　**WEB**：http://takako9.wix.com/nihongo-jts

グローバル化への適応としての外国人雇用

(有)河村工業　専務取締役・河村悦郎さん

北海道中小企業家同友会函館支部では、高齢者、障がい者、外国人などさまざまな視点から雇用問題の改善について情報を集め、分析し、政策を提言する「政策委員会」活動を行っている。外国人雇用についての委員会のメンバーである河村悦郎さんは「外国人の雇用を考えるに当たっては、まず国際化の意味を考える必要があります」と強調する。

「私の考えでは、Internationalとは国家の存在を前提とし、それぞれの国が結びつくという意味です。これに対しGlobalは国家の集合体としてではなく、地球を一つの均質なものとみなしています。世界の均質化の流れをもはや止めることは出来ません。外部環境の変化に適応するために、私たちはInternationalであることを求められると思うのです」

つまり、グローバリゼーションに適応する上で、さまざまな国と国との結びつきをより強めることが必要とされている、ということだろう。確かに国際物流の高度化や製造業の海外移転が進み、日本では今や「食」も衣服も国際社会との関わりなしに成り立たない。一方で国内での急激な少子化・高齢化により、雇用の現場でも農業や水産加工などでは外国人労働者が重要な役割を果たしている。産業や雇用の環境は大きく変化しており、適応が求められているのは函館も例外ではない。

グローバル化の一層の進展や、ますます不足するであろう労働力を確保する上で、外国人の存在は大きい、と河村さんは考える。外国人を雇用する場合には、雇う側が就業規則やルールをわかりやすく説明をする必要があり、在留資格・期限などについてもしっかり学ぶ必要がある。就労に関する決めごとは細部にわたるまで契約書という形で明確化しておくことも大切だ。

ただ、在留外国人の少ない函館で、外国人の雇用を急激に増やすことには河村さんは慎重だ。「外国人の雇用を細かく検証し、しっかりと情報を集め、受け入れる一歩を進めてゆくことが、函館が国際社会に対応するための基礎になるはずです」

PROFILE

河村悦郎／函館市出身。中央大学法学部法律学科を卒業後、東京で音楽出版事業と企画・デザイン、経営コンサルティングを行う(株)クラウナーズデザインを設立。現在は家業の建築塗装業の傍ら、東京での経験を基に道南地域の中小企業の経営改善を提唱する。

外国人が暮らしやすい地域とは

佐々木ヨガアシュラム主宰・アルーン・ヴァガーイさん

PROFILE

アルーン・ヴァガーイ／インド・コルカタ生まれ。デリー大学出身。15歳からヨガを始める。紅茶、香料、自然食品などの貿易、小学校での英語教育も行う。

日本に来たのが1984年。もう33年になる。函館が国際化していると思うか尋ねると、「美原の大型店舗は英語や中国語の表記もあるし、外国人観光客も多く来ている。ここ数年の変化は著しいのでは」とアルーンさんは言う。確かに海外からの観光客は増えているが、函館が国際化されているかというと、そう単純ではない。

国際化を考える上で、観光客という「交流人口」だけでなく、在留外国人という「定住人口」の視点でものを見ることは欠かせない。言葉が通じず、環境の違う地域に住むのはかなり勇気がいることだ。そうした人びとが、比較的暮らしやすい、居心地がいいと考える地域こそ、国際化されていると考えるべきだろう。

アルーンさんはインドで日本人の奥さんと知り合い、日本に住むことになった。「配偶者が日本人であることはありがたいこと。社会保険や税金など日本のシステムがわかるし、会社経営についても（商慣習や法律上の知識で）すごく助けられることが多い」。アルーンさんのような国際結婚は、外国人が地域に住む大きなきっかけだ。ただ、結婚関係が持続するためには、お互いが英語などの言葉をきちんと話せること、そして異文化を理解する許容量が必要だろう。

函館について、アルーンさんは「在住外国人が少なく、地域が国際化してゆくにはまだまだ時間がかかると思う。まずは海外からの観光客をたくさん受け入れることです」と語る。交流人口を受け入れるうちに地域が変わってゆき、定住する外国人にとっても住みよい地域になることをアルーンさんは期待する。

時々帰るインドでは都市部の人口がどんどん増えて、朝から晩まで道路は渋滞する。雑踏を抜けだして海外旅行に行く人が多いが、向かう先はヨーロッパやマレーシア、インドネシアなどで、日本に行く人とはまだまだ少ないのが現状だ。日本では、海外なら当然あるはずの空港のポーターサービスもないし、なにより言葉が通じない。「世界ではどんなサービスが行われているかを知る必要があります」とアルーンさんは語る。

アダム・スミス×フョードル・デルカーチ

「国際観光都市」を掲げる函館市だが、
函館は外国人の目から見て「国際」の名を冠するにふさわしい都市と言えるのだろうか。
函館に住み、市内の大学で教えるアダム・スミスさん、
フョードル・デルカーチさんに、座談会形式で語ってもらった。

司会・池田誠（HIF）

池田　一口に国際化と言いますが、「住む人から見ての国際化」と「観光で訪れる人から見ての国際化」の二つの意味があるように思います。まず居住者の視点からお聞きしますが、函館は国際化されていると感じますか。国際化するとすれば何が必要でしょう。

スミス　他の街に比べると国際的だと思います。ただ、来日したころは日本語の説明が理解できず、生活に役立つ情報をどこから得られるかを知るのが大変でした。ホームページも翻訳が分からないものもあった。改善が必要と感じます。

デルカーチ　函館が外国人の多く住む国際都市を本当に目指すなら、大都会になるしか道はないと思っています。さまざまなものが創造されて消費されるような都会でないと外国人は集まりません。いろいろなインフラ整備も必要でしょう。ローコストな航空会社が参入する空港とか。アクセスの良さは国際化に必須の条件です。ロシアではウラジオストクからモスクワまで往復5万円くらいで行けます。片道8、9時間かかっても安さは重要な要素なのです。

スミス　函館ではどこに行っても遊泳禁止、登山禁止と書かれていて面白みがない。安全第一はわかりますが、「何でも禁止」は国際化の妨げになっているように感じます。オーストラリアでは危険かどうか自分で考えて、その上で泳ぐのが当たり前です。そこは自己責任を持って判断します。

デルカーチ　もうちょっと思い切って言うと、函館には無茶する余地が無いし、冒険することができない。例えば緑の島に出島を造ってオールナイトのナイトクラブを開いてもいい。国際都市になるなら、穏やかさは諦めたほうがいい。エネルギーが要るのです。ある程度、秩序をつぶす覚悟がなければ国際化の道は進めない。中道を歩むのは難しいのではないかと思いますが、それも必要でしょう。

池田　そこまで価値観を大きく変えるのはハードルが高そうですね。現実を見れば函館では少子高齢化が進み、若い人が減っています。不足する労働力を外国人で補うという考え方をどう思いますか。

スミス　介護や医療の分野の労働力として外国人が期待されているかもしれません。でも、日本人の若者ができる仕事も多い。いま外国人を受け入れる必要はないように思います。

デルカーチ　多くの外国人が働くということは、この社会が変わることであり、全てが嬉しいことばかりではないかもしれません。繰り返しますが覚悟が必要だと思います。そもそも日本人の若者が函館を去るということは、この地域に活気がないということではないでしょうか。日本人の若者が去らないようなマチなら若い外国人も来る。そうなれば、元気のある国際都市になるのではないかと感じます。

池田　日本人も外国人も若い人が増えれば国際化された地域社会が実現するということですね。そのような社会に函館の子どもたちが対応できるようにするために、大人がするべきことは何でしょう。

スミス　この地域に仕事があることが大切です。外国語はそんなに早く覚えなくてもいい。今や英語はメインじゃない。中国語を学んだほうがいいですね。

デルカーチ　よりよい教育は必要ですが、よりよい教育をすれば若者は外に出てゆくというジレンマがあります。海外でのホームステイといった経験はもちろん意味がありますが、同時にここに住む外国人の数を増やすことが必要だと思います。

池田　外国人が多く住む地域になった時にはどんな対応が必要でしょう。

スミス　暮らして行くための「ルール」をきちんと説明することですね。なぜそうしてはいけないのか、理由をきちんと書くことです。外国人は、システムを知りたがる。例えば谷地頭温泉で、なぜ石鹸を湯船に入れて行けないのか。案内の表現は必ずネイティブ・スピーカーに確認をしてもらったほうがいい。

デルカーチ　確かにそうです。日本は、「きまりの国」。他の国の人にカルチャーショックを与えるくらい「ルール社会」をつくっています。

スミス　オーストラリアにも、もちろんきまりはありますが、そのルールを超えた「自己責任」の原則がある。日本でも、もっと自己責任で行動する習慣が必要だと思います。

池田　ここからは視点を変えて、観光で来る人から見た国際化についてお聞きします。観光都市としての函館は国際化されていると感じますか。観光の国際化を進めるためにどのような取り組みができるでしょうか。

デルカーチ　観光の面では十分、国際化されているのではな

いかと思います。ただ、塩辛など特産品の説明は多言語で作って欲しい。見ただけでは食べるものなのか、肌に塗るものなのかもわからない。ウエブやパンフレットでも特産品についての詳しい紹介がもっとあればいいと思います。

スミス　観光名所にはかなりの外国人が訪れていて、クルーズ客船も来ています。新幹線も通ったので、外国人客は更に増えてゆくかもしれない。

デルカーチ　最近は韓国との国際定期便が飛んでいませんが、韓国の仁川空港を函館の玄関口にするべきだと思う。復活すれば世界と繋がる。東京でも札幌でもなく、仁川が函館を世界に広報する場になります。ここで函館のPRをしたらいい。特に「ワールド・ミュージックフェスティバル」は国際的に、もっと宣伝してもいいと思う。他に広がる可能性もある。

スミス　西部地区で行われている「バル街」も面白い。素晴らしい企画で、観光客と市民が出会ういい機会になるのではないでしょうか。

デルカーチ　函館、松前を自転車で巡るツアーのような企画も必要ではないでしょうか。安全は第一ですが、アドベンチャー的な要素も必要です。自分も長く日本に住んでいるので、安全第一で冒険があまりできなくなった。ずいぶん「日本人化」したのかもしれないですね（笑）。

スミス　自転車で行くなら森、江差、松前などは魅力的です。木古内と江差の間の風景はすごくよくて、トロッコで走ってもいい。湯ノ岱は最高の場所です。

池田　外国人観光客が増えた時に、住民が気をつけたほうがいいことはなんでしょうか。

スミス　函館では住民がそんなに観光客に出会わないから、気にしないほうがいい(笑)。外国人が来ても、住民は普通にしていたらいいのです。オーストラリア人が大勢訪れるニセコには自国と同じような居心地の良さがあります。20年くらい前にニセコに住み始めたロス・フィンドレーさんがパウダースノーの魅力を発信し続けて、今では中国、シンガポールなどからも多くの観光客が来る。そうした人たちはニセコの普通の人々の暮らしに触れたいと思っているのです。

デルカーチ　同感です。函館市民はそもそもガイドではないのだから、おもてなしなど必要ない。それよりも、もっと沢山の人が来てもらえるよう函館をPRしたらいい。わかりやすい地図や、多言語のパンフレットなどが、もっといろいろな場所にあったらいい。

池田　もっと足元の地域に目を向けてゆくということでしょうか。

スミス　そうですね。ホテルではなく、民泊を広げたらいいと思います。函館山や五稜郭の観光だけでは1日で終わってしまいます。少し長く住んで、地域の魅力を知るような企画を立てることです。ラジオ体操をするとか、谷地頭温泉に行くとか。普通のことが実はとても大きな魅力になると思います。

デルカーチ　函館には小さい宿が沢山ありますが、そういう小さな宿のネットワークをつくって紹介する仕組みがあればと思います。日本人も参加できるようにして、「裏道」を感じるツアーをするとか。場所の匂いを感じるような。わざとらしいのは、あまり外国人は好きではありません。そこでお年寄りと知り合えば、互いが楽しくなるきっかけになる。本当の観光地は、地元住民も歩くところに作られていくものだと思います。まずは、そういう情報を集めることではないでしょうか。

池田　お二人が思う「国際化した地域」とはどこですか。

デルカーチ　札幌は国際都市です。交通インフラも整備されている。航空券も安く買えるし、移動が楽です。函館も含めて地方都市は移動にかかるコストが大きい。新幹線はよくぞここまで来たと思うけれど、値段が高いのが課題です。移動のコストは日本の地方都市の全てに共通する問題です。

スミス　やっぱり札幌ですね。ニセコが外国人に人気なのも札幌や新千歳空港に近いからです。それに比べて函館では新幹線の駅が函館駅から遠い。何か魅力に変えて発信することが必要です。

池田　この函館を外国人にも魅力的な場所にするための方策とは何でしょうか。

デルカーチ　広域で考えたほうがいいと思います。函館を県庁所在地のようにして、渡島、檜山を巻き込むとか。以前住んでいた鳥取市は人口が少ないけれど、県庁所在地なので大きなイベントなどが来る。函館も、隣の県の県庁所在地である青森市とうまく連携したらいい。青森の人たちは函館の歴史や文化も好きだし、もっとつながれば新しい可能性が広がる。観光資源では函館は札幌にも負けないポテンシャルがある。面白いことができるかもしれません。

スミス　ニセコはトライアスロンやバイクツアーなど、外国人に人気のあるスポーツができる。日本では各地でマラソンが行われていますが、国際的に見るとトライアスロンやバイクツアーの方が魅力的です。もっと外国人が何を求めているかを知る必要もありますね。

PROFILE

アダム・スミス／公立はこだて未来大学准教授。オーストラリア出身。ニューイングランド大学卒業。20代の頃、25ヶ国以上を旅した経験を持つ。メタ学習センター所属。コミュニケーション、バーチャル英語プログラム(VEP)などを教える。

PROFILE

フョードル・デルカーチ／ロシア極東連邦総合大学函館校副校長。ロシア出身。極東国立総合大学東洋学部日本語学科卒業。鳥取県総務部国際課国際交流員。日本語通訳の資格を有する。大学では実用ロシア語、ロシア文化史、哲学などを教える。

さらに外国人客を呼び込むために

市民が「もてなしの心」を―函館市観光部次長・柳谷瑞恵さんに聞く

聞き手・池田誠（ＨＩＦ）

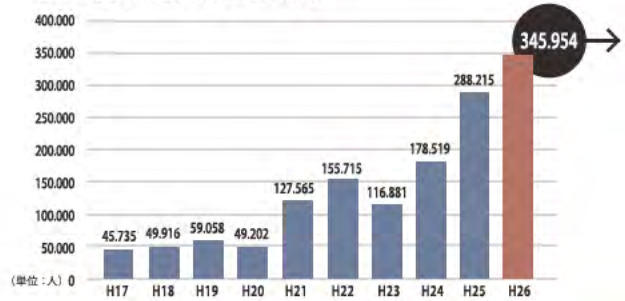
函館市の統計によると、２０１５年度の観光客入り込み数は４９５万人。このうち訪日外国人旅行客は約40万人に迫るという。台湾、中国、香港、韓国をはじめ、シンガポール、タイ、インドネシアからの来函も伸びている。「ムスリム観光客の受け入れ体制の充実など、多様な食文化・習慣を持つ外国人への対応も必要になってきています。アジア地域で観光プロモーションを引き続き行いながら、函館の認知度をさらに上げていきたいですね」と柳谷瑞恵さんは語る。

函館市では例年、クリスマスシーズンの12月と、中華圏の旧正月である「春節」にあたる１月末から2月上旬にかけてが外国人観光客のピークだ。「日本人客は北海道の爽やかな気候を求めて春から夏にかけてやってくるのが一般的ですが、台湾や中国、東南アジアの方々には雪や温泉が非常に人気です。冬季により多くの外国人観光客をお迎えすることで、従来、『観光のオフシーズン』と考えられていた冬場の集客が補われる形になっています」

２０２０年の東京五輪・パラリンピックの前後、多くの来日客が見込まれる中で外国人に「訪れてみたい」と思わせるには、単一の地域だけでなく、広域的な観光ルートで魅力を発信することが大きなポイントとなると考えられている。柳谷さんは「例えば『東日本ゴールデンルート』として東京から青森、そして函館までをつなぐ取組みや、『北海道ゴールデンルート』として函館、ニセコ、洞爺湖や登別を経由し札幌まで周遊するコースなども考えられます」と説明する。

函館市では北海道新幹線開業を機に、青森県の青森、弘前、八戸の青森県内4市と「青函圏観光都市会議」を立ち上げ、台湾の航空会社や旅行会社の担当者を招いて4市を巡るルートを体験してもらうツアーを実施。青函圏を周遊する旅行商品の企画を促すなどしている。「訪日外国人向けのＪＲの乗り放題乗車券『ジャパンレールパス』は定評があります。ぜひ北海道新幹線を使った広域観光を体験していただきたいですね」

函館を訪れた外国人観光客数の推移



国・地域別の内訳（平成26年度）

（単位：人）

台湾／	228,774	中国／	50,772
香港／	12,131	韓国／	10,473
シンガポール／	10,394	タイ／	10,159
マレーシア／	5,697	アメリカ／	3,336
インドネシア／	2,467	その他／	11,787

資料提供／函館市

日本の名だたる観光地を紹介する「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」では「函館山からの眺望」が三つ星に輝き、元町の坂、旧函館区公会堂や五稜郭跡など21か所で星を獲得した。「海外からも評価される様々な観光資源を誇りを持って磨き、その価値を日本人にも外国人にもわかりやすくアピールしていきたいと考えています。世界の人々が再訪を思う夜景や旬の味はもちろん、『あの人にまた会いたい』と言われるまちを地域の皆さんとともにつくっていきたいのです」

ソフトな語り口ながら、市民全体で国際観光の質を高めていきたいという強い思いが伝わってきた。市民一人ひとりの「もてなしの心」が高まることこそ、本当の意味での「国際観光都市・函館」につながるのかもしれない。

PROFILE

柳谷瑞恵／函館市生まれ。関西外国語短期大学卒業。2016年から現職。「観光」とは、よその土地に行き見聞を広げ非日常を味わうこと。すべての国の方々を温かく迎え入れるまちを目指したい。自身の趣味も旅行。

朱妍卉さんの函館生活

特集 函館の『国際化』を考える。

この春、函館バスで、観光路線バスのアルバイト車掌として働き始めた中国人留学生・朱妍卉（シュ・ケンキ）さんにお話をうかがった。

「めっちゃ寒いのが好きなので」北海道を選んだ理由をはじける笑顔で教えてくれた。朱さんにとって、日本への留学は、お気に入りのケーキを選ぶように普通のことなのかもしれない。それは、家庭環境が少なからず影響している。

両親は大学教員で、父親も日本での仕事を経験しており、留学している親類も多かった。国際感覚を持つ家庭で育った朱さんは、大好きなアニメや空手の影響も相まって、中学に上がる頃には既に日本に行くと決めていたという。

そんな朱さんも、来日当初は挫折も味わった。日本語がうまく話せなかったため、折角決まった清掃のアルバイトも解雇されてしまった。悲しくて中国に帰ることも考えたが、母親からの励ましもあり、日本語の勉強に勤しんだ。日本語ができるようになると、徐々にコミュニケーションもとれるようになり、だんだん日本留学が楽しくなったという。

言葉の壁が取り払われると、言葉が有能なコミュニケーションツールとなる。函館市内の水産学部に通学することとなった今年の4月からは、日本語、中国語、英語の三カ国語を駆使して、観光路線バスの車掌のアルバイトの職を得た。運行する函館バス(株)バス事業部は「外国人のお客様からの評判も良く、既に頼もしい戦力になっています。」と目を細める。

「函館の暮らしにまったく不便はありません。大好きな海もあるし」と朱さん。海を越えて、国際交流を進める函館でも欠かせない大きな力となっている。

中国人観光客を笑顔でバスに誘導する朱さん。

PROFILE

中国河北省出身。2012年に日本へ留学。京都で日本語を学び北海道大学へ入学。本年4月から函館市内の水産学部で学ぶ。海洋資源科学科に在籍。

昔の子ども、今どきの子ども

第二話

地域で作ったあの頃の運動会

庄司 証／函館圏フリースクールすまいる・代表

北海道では春に運動会をする。当たり前だと言われそうだが、全国的にみると珍しい。珍しいのはそれだけではない。ビニールシートがグラウンドを囲むように敷かれ、その上にはジンギスカン鍋と、ビールを片手に肉を焼くお父さん。親戚一同勢揃いでお重を広げ、校門前には出店もあって、卒業した先輩達も応援に来ている。それが、自分の体験した小学生の頃の運動会の光景でもあった。

そんな北海道の運動会は松前町の松城小学校から始まった。1886年6月に開催された運動会が北海道における最初の小学校運動会だと言われている。

その数年後には、松城小学校を含む3つの小学校が合同で運動会を行い、その当時の賑わいぶりを函館新聞が記事にしている。子どもの数を超える150人もの地域の人が集まり、弁当にお酒も持って、家族だけでなく中には芸妓を伴って来た人もいたらしい。

まさに地域ぐるみの一大イベントとしての運動会の原点がそこにあったのではないだろうか。

そんな運動会だが、実は教科の体育に含まれるのではなく、学習指導要領の健康安全・体育的行事に関する「学校行事」である。体育等の授業はもちろんだが、係活動、様々な教育活動の集大成であり、子どもの集団意識だけでなく、保護者や地域住民とのかかわりから責任感や連帯感、自信を生み出す機会として期待されてきた。しかし、今や、運動会の立ち位置そのものがぼんやりとしかけている、と言えるのかもしれない。

子どもの減少や家族構成の変化、地域のつながり、あるいは校内での火気使用やアルコールの禁止等によって、昔のような運動会の光景はほとんど見られなくなった。

また、時代の変化とともに学校自体の在り方が問われるようになり、新しい運動会の在り方も求められ始めている。子どもの教育活動は当然だが、地域の様々な人との交流を積極的に図り、特色ある、地域に開かれた運動会が望ましいのだそうだ。

そういうことから考えると、かつての北海道型の運動会というのは、一つの理想型だったのではないだろうか。

そうは言っても、昔のような運動会をそのままできるわけではないが、子どもの頑張りを通じて、地域が「生きている」ことを実感するのは今も変わらない。

運動会が松前から始まったように、もともと子どもを地域で育てる潜在的な力が道南にあるのだとしたら、その主体は学校であっても、今に即した形での魅力的な運動会を保護者や地域が一緒に作っていくこともきっとできるはずである。

PROFILE

七飯町出身。北海道教育大学大学院修了。在学中から「チーフーキリスト教学園」の活動に参加し、2012年「函館圏フリースクールすまいる」設立。不登校や若者の居場所支援などを行っている。

人と水と空と森の話

第二話

街なかの水

中川大介／人と水研究会

かにかくに
祇園は恋し寝るときも
枕の下を水の流るる

吉井勇

石畳を縫って白川せせらぐ京都・祇園を愛した歌人の歌を引くまでもなく、街なかを流れる水のうるわしさは、ひとを引きつけてあまりある。

たいがいの都市は大きな川の流域にある。豊平川扇状地に形成された札幌市では、毛細血管のごとく張りめぐらされた小河川のおおくが埋められたが、今なお扇端部の北大構内では清冽な伏流水が湧く。百万都市となってなお広瀬川の伸びやかな蛇行を許す仙台市の豊かな水辺風景には、ながい時をかけて形づくられた「街と水」についての都市哲学を見る思いがする。

種々の恵みと脅威の双方をもたらす「水」と、いかに付き合うか。川の姿には、その地の人びとの暮らしの哲学があらわれる。「水の街」として知られる奥美濃の郡上八幡では、豊かに湧き出る水をためて随所に「洗い場」がつくられ、地域の「洗場組合」が汚濁をふせぎつつ水を「ワイズユース」する自主管理の仕組みが生きている。

わが函館の街なかに、そのように水に親しむ場は少ない。街を南北に貫く亀田川は、中流域の笹流ダムあたりまでは緑陰の川辺をそぞろ歩いて水のにおいをかぎ、点在する大小の玉石を磨く清澄な流れに手をひたすこともできる。だが神山町のあたりから、コンクリートの擁壁に囲まれた谷底を流れる水路となり、せせらぎが耳に届きはするが、川は人びとの暮らしから遠のいてゆく。

さらに下流へ進めば、河道の傍らに堆積した土砂に草本や樹木が無秩序に生い茂る。水辺へ降りる階段が幾つかあるが、「親水空間」はごく限られる。

「函館市水道百年史」（函館市水道局）から転載

川があったころ

現在の亀田川は五稜郭跡の傍らを流れ、高砂通りの「中の橋」でほぼ真南へ折れて「新川」となり、大森浜へ流れでる。切り立った擁壁にかこまれ、まっすぐな流路に押し込められた新川の流れに、たえまなく変化しながら「動的平衡」へと向かう川本来の表情は乏しい。

PROFILE

岩手県生まれ。新聞記者。カヌーや渓流での釣り好きが高じて人の暮らしと水とのかかわりに興味をもち、仲間と「人と水研究会」をつくって、水辺歩きを続けている。

亀田川にかかる中の橋。かつてこの先の高砂通りは「願乗寺川」だった

かつてこの川が函館山ちかくまで街なかを流れ、大森浜とは反対側の函館湾へそそいでいたころを思い描いてみる。幕末から明治の中ごろにかけて、中の橋以南の高砂通りは、「願乗寺（がんじょうじ）川」と呼ばれる亀田川の下流部であった。地峡（陸地をつなぐ部分のこと。ここではかつて島だった函館山と北海道本島をつないだ砂州の部分）を南下し、現在の十字街界隈の銀座通りにあった運河「高田屋通りの掘割」にまじわり、港へとそそいでいたのである。

浄土真宗本願寺派の僧侶堀川乗経が発意したこの人工の川が開削されたのは、幕末の1859年（安政6年）。それ以前、亀田川は梁川町から亀田八幡宮ちかくを蛇行しながら万代町あたりで函館湾にそそぎ、氾濫を繰り返す農民泣かせの川であった。それが梁川町付近から、新たに開削された願乗寺川に分水されたことで、氾濫被害は軽減されたのであった。一方で開港を迎えて人口が増えていた地峡部では願乗寺川から生活用水を取れるようになり、また河畔の土地が乾燥して人が住める範囲が広がった。民間が主導しての治水、利水の先駆的な試みであった。

流れのかたわらに板壁の家々が軒を連ね、人びとが日々の暮らしに要る水を川からくみ上げる光景を想像してみる。そこには、身近な水と人のかかわりがあったように思う。

だが、人口の急増とともに川にかかる負荷は増す。人工河川の願乗寺川は汚濁がすすみ、河口に砂泥が堆積し、さらには伝染病の発生源ともなって「厄介者」扱いされるようになる。代替え水源の必要性を叫ぶ声が高まり、国内2番目となる上水道が函館に完成した。1889（明治22）年のことである。亀田川の上流部で取った水を導管で西部地区へ引き、安定的な給水が可能になった。

亀田川の水の多くは新たに開削された流路、すなわち新川を通って大森浜へそそぐ現在の形になった。願乗寺川は廃川となり、水道敷設で生じた掘削土を使って埋め立てられた。そこが高砂通りになった。

函館の発展が加速すると同時に、川は暮らしの風景から遠ざかっていったのであった。

近い水から遠い水へ

井戸や近隣の川の水といった「近い水」を利用する暮らしから、遠方のダムなどで取った水を導管で引き込む「遠い水」を利用する暮らしへ―。これが中世から近代へと移りゆく時代のなかで、水の利用に関して起きた変化であった。その結果、私たちは水の確保に関する不安定さ、取水をめぐる対立、氾濫のリスク、汚染がもたらす害から解放された。

半面、水と親しみつつ汚濁を

函館市中道付近の亀田川左岸から下流を望む

ふせぎながら利用し、氾濫のリスクに地域全体で備えて、「近い水」と付き合う日本古来の環境哲学は忘れられていった。

環境社会学者の鳥越皓之のつぎの言葉は、心に深く響く。

「わたしたちは次のような選択をした。すなわち、自分たちの生活を川から遠ざけたのだ。そのうえ、洪水の危険性や衛生面の問題などの河川が抱え込んでいた負の側面に対して、集落などのコミュニティが緊張感をもって対応してきた歴史を捨てて、それらの対処を役所にまかせるという選択をしてしまったのである。言葉を換えれば、人びとは川に背を向け、できるだけ川や水路を見ないようにし、面倒な管理は役所にまかせるということをしたのだ。その結果、集落のあいだを流れる川の多くは、河床も含めて三面にコンクリートが張られたり、蓋をして見えないようにする暗渠化も進んでいってしまった」

「里川の可能性　利水・治水・守水を共有する」（編者代表・鳥越皓之、新曜社、２００６年）

これは主に、地域社会が長い年月をかけて川や水との付き合い方を築いた事例を想定した分析ともいえ、願乗寺川には単純に当てはまらないかもしれない。亀田川の勾配のきつさ、函館市街地の狭さや住宅の稠密さ、水不足の深刻さを考えれば、流路を固定してぎりぎりまで土地利用をすすめ、また水道の敷設を急いだ事情も理解できなくはない。

だが、亀田川への心ない廃棄物の投棄が後を絶たない今日の状況を思えば、川をかえりみなくともよくなったことが、住民の川に対する愛着や、地域の自然と向き合う心を後退させたように思えてならないのである。

水辺の風景

願乗寺川には八つの橋がかかっていたという。中の橋より上流には、亀田橋、湯ノ川橋、柳橋の三つ。現在の橋とは位置も形も違うのだろうが、「川の記憶」をたどりながら、初夏へと向かう季節を告げるように咲く八重桜やヤマブキ、ツツジを愛でつつ川伝いに歩けば、水辺がすこし親しく感じられる気がする。

願乗寺川が埋め立てられたあと、わずかに堀として残る部分があったころの光景を、明治うまれの郷土史家神山茂が書き残している。

「川蟹を捕らえて皆でわいわい騒いだこともあった。空にはひばりが囀っていた。溝の傍の木蔭から何の小鳥か判らないが、卵の入っている巣を見つけ出したこともあった。こうして、小鮒を掬いながら中の橋まで行って、夕方幾匹かの鮒を瓶に入れて家に帰って来たものである」

「願乗寺川と新川」神山茂著作集第２集（神山茂著作集刊行会、２００３年）

近代化のなかで私たちが忘れ去ったものを取り戻すには、このような光景の再現が必要と思えてならない。

参考文献
「願乗寺川物語　はこだての街を作った人たち」木村裕俊、２０１５年、自費出版

PERSON@h
●新・函館人

中野由貴

FMいるか　パーソナリティ

大学卒業後、大手機械メーカーで広報担当として勤務。その後、出身地の広島や東京のＮＨＫで、フリーランスの立場でテレビやラジオのキャスター、リポーターとして活躍した。ＮＨＫ時代の上司から、「函館で、君のようなキャリアのある人材を捜しているよ」という話を聞き応募。ＦＭいるかの一員となったのは42歳の時だ。それまでのように細分化された仕事のやり方とは違い、さまざまなことを自分でこなさなければいけない。後進の指導も期待される。そんな状況に最初はとまどいもあったが、今はやりがいも感じ、楽しいと語る。

現在、全国におよそ３００あるコミュニティＦＭ局だが、ＦＭいるかがその開局第１号として誕生したのは１９９２年のこと。番組のクオリティやバックアップの体制などから、他局からの注目度は20年以上経った今も変わらないという。

テレビ・ラジオ離れが叫ばれて久しいが、「詳細な災害・防災情報など、コミュニティ局だからこそできることがあります」と、最近『防災士』の資格も取得した。

●中野由貴（なかのゆき）／広島県生まれ。FMいるかチーフパーソナリティ。現在の担当番組は、「おはようさわやかさん」（火・水 7〜10時）、「昭司と由貴のハッピーフライデー」（金 10〜15時）。

WU-BOOK

●ウー・ブックスの書棚から。

夏井俊介／ウーブックス店主

先日、久方ぶりに東京へ行き、本屋にとって最重要であろうと直感した人物にお会いしてきた。それはコラージュアーティストのM!DOR!(みどり)さんという方だ。有名雑誌や単行本のアートワーク、レコードジャケットや服のテキスタイルなど、素敵なコラージュで国内外で活躍されている方だ。

その作品は、主に1800〜1940年代の古書を素材として作られているので、“本”は彼女の作品の“故郷”といってもよい。だから必然的に古書好きということになるし、本屋としては「繋がっておかなければ、一緒に何か事を起さなければ」そう思わせる人物なのだ。

ということで、めでたく今年の９月〜10月頃、WU-BOOKで彼女の個展・コラージュのワークショップを開催することが決まった。とてもノリが良く、気さくな方なので、皆さんも彼女と彼女の作品たちに触れ、仲良くなっていただければ、こんなに嬉しいことはない。

M!DOR!／1986年 横浜生まれ。大学卒業後5年間デザイン事務所に勤務。2010年よりコラージュアーティストとして活動開始。GLAYのツアーパンフレット、三代目 J Soul Brothersの誌面、山内マリコ「かわいい結婚」の装丁などの他、ベルリンのブランド「RAKI」ともコラボし、活動の幅を広げている。

PROFILE

群馬生まれ函館育ち。夏井珈琲勤務の傍ら WU-BOOK を経営。古今東西の素敵な本を発掘して紹介している。

WU-BOOK
函館市中道2-48-4
毎週水曜のみ12:00〜24:00時頃まで営業。

シネマでコーヒーブレイク

米田哲平／函館港イルミナシオン映画祭実行委員長

「台湾人生」（2008年）「台湾アイデンティティー」（2012年）

監督／酒井充子　配給／太秦

酒井充子監督は、山口県で生まれ、大学卒業後１９９６年、北海道新聞社に入社。函館支社勤務となり、当映画祭をはじめ、函館ロケの映画制作を取材するうちに映画の世界に興味を持つようになる。１９９８年夏、初めて台湾へ。２０００年から始めた７年におよぶ台湾取材を通じ、日台間の忘れてはならない歴史を浮き彫りにする。

「台湾人生」は、台湾が日本統治下にあった時代に青少年期を過ごし、「日本語世代」と呼ばれる人々を追ったドキュメンタリー。日本統治時代から戦後の国民党独裁時代を経て現在に至るまで、激動の時代を生き抜いてきた５人の日本語世代にカメラを向け、それぞれの人生を振り返る。

２作めの「台湾アイデンティティー」は、日本統治中〜統治後の国民党時代を中心に二・二八事件やそれにまつわる弾圧や抵抗、そして独立に対する想い、民族の誇り、祖国を離れて暮らす人、時代に翻弄された台湾人の生の声が聞こえてくる。

国際化する社会の中で、日本と台湾の関係性を題材にしたドキュメンタリー映画を世に送り出してきた酒井監督の「台湾３部作」最終章の製作が現在進行中である。今から楽しみだ。

PROFILE

滝川市出身。函館における数多くの文化事業や施設・イベントの企画運営に携わる。現在は（公財）函館市文化・スポーツ振興財団。

KOMIYA'S CREATION DIARY

小宮伸二／美術家

5月11日、雨の翌日。

この季節の雨は好きだ。雨上がりに外を歩いていると、何処からか漂う微かな花の香りや、湿り気を帯びた新緑の匂いを感じる瞬間がある。その不意の出来事は、記憶を掘り起こすような刹那と正体の定まらぬ朦々たる懐かしさを呼び起す。ー 僕は一滴の水を水面に落とす。

写真のインスタレーションは、水面に広がり交わる複雑な波紋の模様をそのまま空間に投影しているものだ。映像やプロジェクターではない。現実の水があり、湿り気を帯びた水の匂いが漂う。あたりには水滴の音が響き渡る。壁や天井に映しだされているのはいわば水の影だ。ある時は素早く逃げ去るように、ある時は空間全体に大きく弧を描くようにゆっくりと、その動きは複雑で二度と同じ表情を見せることはない（写真では解りにくいのが申し訳ないが、ご想像頂ければ幸いだ）。ナポレオンの骨を探すために掘り起こされた地面を持つ此処は、オーストリアの教会遺構である。僕は遺跡であったり、使われなくなった建物で作品を創ることが多い。そこに生命の象徴である水を与えることで、止まった時間を再び動き出させ、その場所の記憶を呼び覚ます。水のインスタレーションはアレゴリー（諷喩）であり、そのための装置でもあるのだ。そう、まるでこの季節の雨のように。

※今後の主な活動予定
●**9月3日-18日**
アートアイランズTOKYO・国際現代美術展（東京・大島）
●**9月4日**
はこだて工芸舎にて函館バル街初のアート参加予定

PROFILE

函館出身。インスタレーションをおもな表現手段とした現代アート作家。海外でもオーストリアを拠点とした東欧各地やアメリカで個展開催、シンポジウムなどにも数多く参加。

近藤さんちの今日のお昼ごはん

近藤 緑／フードスタイリスト

[ステーキ&お裾分け野菜の付け合せ…]

「いや〜今日も暑いねぇ」そう言いながらニヤニヤ、我慢の限界にはまだ余裕あり…そんな道南の夏が大好きです。

朝起きると、早起きな裏のおばちゃんは趣味の畑仕事をもう終えてきたところで、ピカピカな採れたて野菜をお裾分けしてくれた。これをもりもり食べるなら…合わせるのはやっぱりお肉！茄子の揚げ浸しに胡瓜の甘酢漬け、トマトとアボカドは一味唐辛子効かせてピリ辛和えに。ズッキーニも新鮮ならば生のまま胡麻油・塩胡椒でナムルに。ピーマンはじゃことナッツとさっと炒めて…後はたっぷりのリーフサラダと薬味野菜を用意。それではいよいよステーキ焼きましょ！片面を強めの中火で 1 分、もう片面を弱火で２分。役者が揃ったらお皿にご飯を盛って思うままに野菜とお肉を載せていく。暑いんだから、細かい事は気にしない！わっしわし混ぜて「いただきまーすっ」

PROFILE

美大卒業後、フードスタイリストの道へ。女性誌、広告、等の経験を経て、32歳の時、故郷の乙部町へUターン。現在は函館市内を中心にイベント出店や料理教室などを行う。

函館モノ語り。

[土方歳三最期の地碑]

押野友美
ライター

函館市若松町の市総合福祉センター敷地の若松緑地公園内に「土方歳三最期の地碑」がある。あの新選組副長の土方歳三が散ったと言われている場所だ。全国各地から新選組や幕末ファン、歴女が訪れる名所となっている。

土方が戦死したのは1869年(明治2年)5月。諸説あるようだが、箱館戦争の終盤、新政府軍の総攻撃に反撃しようと出撃し、現若松町あたりの一本木関門で銃弾を受けて倒れた、と伝わる。最期の地碑は私が若松小学校に通っていた頃、若松町の八幡通のグリーンベルトにあった。その前は、現在石碑が建つ場所にあった若松小の敷地内にあったと聞く。

小学生の私はグリーンベルトの真ん中に建つ石碑に時折、色とりどりの花が添えられるのを見ていた。花が添えられる石＝(イコール)墓だと信じていたので、「あれは墓ではないよ」と先生から聞き、なぜいろんな人が来ては花を添えるのか不思議に思っていた。

さらに、そこが「どかた」と間違えて覚えていた「ひじかた」の最期の地だと教わり、戦の混乱の最中、なぜあの場所が最期の地だとわかったのか、想像を膨らませた。土方の仲間が「副長が亡くなったのはここ」とマーキングでもしていたのか。それとも新政府軍が「あそこで土方を討ったんです」と自慢げに話したのだろうか。残された資料や史実から土方が最期を迎えたであろう場所が推測されたのだろうが、小学生の私の頭の中はしばらく「最期の地」でいっぱいだった。

あれから40年近くが経つが、最期の地碑には今も変わらず花が供えられている。伝わる土方の人物像などから、多くの人があの石碑に花を手向ける理由はわかった気がする。ただ、石碑を見るたびに最期の地についていろいろ考えてしまう癖はまだ抜けていない。

PROFILE

函館市生まれ。地域情報紙記者。食への探求心が旺盛で、旅先で出会うソウルフードが楽しみ。最近は大沼湖畔のキャンプ場で大勢で囲む夕食が好き。

もっと知りたい、世界の音楽。

ふくだたくま
一般社団法人ワールズ・ミート・ジャパン

Time for music.

コンピューターゲーム『テトリス』のテーマで知られるロシアの民謡「コロブチカ」。誰もが知る代表的なフォークダンスの曲であり、思い浮かべてもらえば、いかにも伝統的な赤と白の人々が、頭の中で踊り回るにちがいない。

とはいえロシアは広大だ。実際には「ロシアっぽくないロシア」がある。例えばブリヤート共和国に住む人々の見た目は、日本人と変わらない。巨大なかぶり物を使う彼らの伝統舞踊は、強いていえば中国風だが、その動きはこれまで見たことがない。さらに東のカムチャツカでは、動物の毛皮の衣装をまとい、片面太鼓を手にした若者が音楽にあわせて踊る。これは極北のイメージ、といったら伝わるだろうか。

ブリヤート人の印象はとにかく強烈。作家の佐藤優が『知の教室』(文春文庫)で彼らとの出会いを描いているが、実感はこれに近いので興味があれば読んでみてほしい。音楽や伝統文化に関心を寄せれば、これからも「あんなロシア、こんなロシア」が顔をのぞかせると思う。

ブリヤート共和国から来たグループ「トーント」による伝統舞踊。
写真／エモトヒデユキ

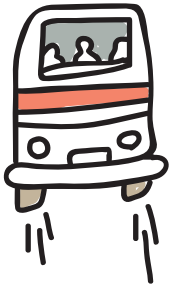
PROFILE

北海道根室市出身。「はこだて国際民俗芸術祭」の制作を担当。といっても事務畑なので、音楽の知識より「安全管理」を優先させているとか。平和が一番。

店主❷の

「函バスの後部座席で正義を叫ぶ!」❷

中村ひでのり／本誌編集人



僕は車の運転をしないので、毎日の通勤には函館バスと市電を利用している。その車内で、度々「マナー」について考えさせられる場面に出くわす。

東京に住んでいた頃よく見かけた、友だちとギャーギャー騒ぐ学生、というのは意外と少ない。それどころか、降りる時に乗務員にていねいに礼をいう高校生がたくさんいて、自分の高校時代とは変わったなぁと感心したりもする。気になるケースは年配の客に多い(もちろん、大半はきちんとしているのだが)。周りに聞こえていることも気にせず、大声で嫁の悪口を言い合うおばあちゃんたち。バスが動いているのに「このバスは○○に行くのか」と訊ね、「そこには行きません」と聞くと「だったら止めて降ろしてくれ」と言いだすオジさん。料金を支払う時に「20円足りません」と言われ、「もう手持ちの金はない」と開き直ったおじいちゃんは衝撃だった。程度の差はあるかもしれないが、東京でも似たようなことは何度か目撃した。が、その頻度は圧倒的にこちらの方が多いように思う。

函館駅前の電停では、列を平気で無視し、先頭に割り込む高齢者を時々見かける。なぜあんなに必死に割り込んで、先に乗り込みたいのかと考えてみる。「順番を守っていたら席に座れない」と考えるからだろうか。でも、もし空いていなかったとしても、お年寄りだとわかったら誰かが席を譲るはずでは…。ひょっとしたら、なかなか譲ってもらえない場合が多いということなのか。あるいは「譲られるのはプライドが許さない」とか…。彼(彼女)らを見ていると「私は年寄りなんだから、割り込みぐらい大目に見ろ」と考えているように映る。

行き先を間違えた客を途中で降ろしてやる寛容さも、時には必要かもしれない。たまにはよそんちの嫁さんの悪口を聞くのもワクワクするし…。これが田舎の長閑さなんだと楽しめたりもする。ただそれは、どこかで線引きをしないと際限なくゆるいものになる。さて、それじゃどの辺りにその線を引くかが難しい。

『公共マナーは社会の成熟度に比例する』というが、この街の成熟度はどれくらいなんだろう。少なくともギスギスした様子の高齢者を多く見かける社会を、成熟しているとは言えないだろう。彼らが席を気にして割り込みをしなくても、きちんと席が担保されている程度にはならないといけない。外国人観光客のマナーをもっともらしい顔であれこれ言うのはそれからだろう。

PROFILE

北斗市生まれ。本誌編集人の他、ピープス函館の制作にも携わる。リーヴズ、ハルジョオン・ヒメジョオン代表。

武者行列

西野鷹志／文・写真

開業して間もない北海道新幹線で南下、2時間半で仙台到着、あっという間であった。乗りかえた在来線は峠をゆっくりのぼり、山桜が散りかけ木々が芽吹き、山里の春であった。

米沢駅から国宝を目にしようと上杉博物館へまっしぐら。狩野永徳筆「上杉本・洛中洛外図屏風」。このところ、戦国時代小説にはまっている。この屏風は、織田信長が上杉謙信のご機嫌とりに贈ったとか。我輩が知るのはこのぐらい。屏風に目をこらすと銀閣、金閣などのお寺や御所、さらに公家や庶民の鴨川の水遊びなど四季おりおりの暮しがいきいきと描かれている。

目にとびこんできたのは、馬上の武士を先頭に立派な輿に乗る大名らしい武者行列。学芸員によれば、輿の貴人は上杉謙信で、年始祝いに将軍足利義輝の花の御所に向かっている、と。この一言で、洛中洛外図の戦国の世に引きこまれた。誰が狩野永徳に描かせ、信長は、なぜ謙信に贈ったのか。

450年ほどまえ、将軍義輝が、落ち目の権力にてこ入れするべく、盟友の謙信に贈ろうと永徳に描かせたが、義輝が新興の松永弾正らに攻められ自刃して果て、この屏風は宙に浮いた。上洛し天下人への道を歩む信長はこれを手に入れ、ともに争う武田信玄の宿敵・謙信との同盟を固めるために贈ったといわれ、政治的意図をもった屏風であった。

おもしろいことに義輝をおそった松永弾正の屋敷が描かれている。茶人でもある松永を常人ではできぬことを三つもやった男とは信長の言。主家三好の暗殺、将軍暗殺、奈良東大寺大仏殿の焼打ち。信長も比叡山焼打ち、長島一揆火攻めと悪行をかさねているが……。

戦国の世も終わりを告げるころ、謙信の後をついだ上杉景勝は越後から会津へ転じ、関ヶ原の戦いで石田三成にくみして120万石から米沢30万石へ減封、さらに15万石と貧乏をかさね徳川の世を生きぬく。家宝の屏風をまもりぬき、30年ほどまえ上杉家から米沢市に寄贈された。

今も昔も名高い近衛邸の糸桜が、洛中洛外図では蕾であったが、博物館そばの米沢城址の桜は散り、お濠いっぱいに花筏が広がっていた。風まかせに漂うその花びらに、足利将軍の無念を思う。

花筏／2016.4　米沢城址

PROFILE

西野鷹志（にしの・たかし）　東京生まれ、函館育ち。タウン誌・街で「ライカは行く」を17年間連載、2012年・147回で終えた。現在、函館大妻学園理事長。好きなもの―フランスパンの皮、ブルゴーニュワイン、フィルムライカM6。

H I F ●インフォメーション I N F O R M A T I O N

大沼の魅力を女性目線で発信したい。

「大沼ラムサール女子会」が誕生！

七飯町の大沼が、豊かな自然環境を守るラムサール条約の登録湿地に道南で初めてなったのが2012年。台湾や中国からはもちろん、ビザの発給要件の緩和に伴って東南アジアなどからも、訪れる観光客は増えている。春から夏にかけての観光最盛期だけではなく、紅葉の秋、そして長い冬の季節にも雪を見たいとおおぜいの人が集まる。

近年は団体旅行から個人旅行へと旅行形態も変化しており、一人旅やカップル、少人数のグループで訪れる人たちにも、大沼のさまざまな魅力を伝える工夫が大切だ。

そこで、大沼の魅力を多面的に伝えたいと、2015年、「大沼ラムサール女子会」が誕生した。女性の目線で、大沼の自然環境や、畑や湖水がもたらす食の恵みを紹介し、その中で暮らし、また生産活動に励む人たち、さらにはそうした人たちが大切にしている場所や、とっておきの体験を発信していこうという目的で結成された。現在は、地域住民や大沼に魅せられた人など５人で構成。活動の本格化へ向けて、メンバーと活動を支えるスポンサーを広く募っている。

活動の様子

「大沼ラムサール女子会」
問い合わせ／
北海道国際交流センター内
0138-22-0770（担当：齊藤）

お問合せは下記まで

HIF HOKKAIDO INTERNATIONAL FOUNDATION

（一財）北海道国際交流センター（HIF）
040-0054　函館市元町14-1
TEL. 0138-22-0770　FAX. 0138-22-0660
http://www.hif.or.jp/volut/

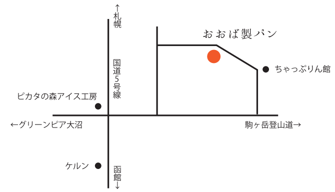
おおば製パン

現在のように便利な世の中ではない時代から
続いてきたパン作りに憧れて ――

この春、駒ヶ岳の麓にオープンしました。

当店のパンは、粉と水だけを混ぜ合わせて
酵母（ルヴァン種）をつくり、
それをもとに生地を捏ね、ゆっくりと発酵させて、
薪を燃やして熱を蓄えた窯でしっかりと焼き込みます。

手間のかかる作り方ではありますが、
この方法でしか伝えられないものがあると信じて
パン作りをしています。



〒049-2142　茅部郡森町字赤井川 412-132　Tel. & Fax. 01374-7-1120　月曜休

函館 戸倉町
NEW OPEN!

guruguruguruguruguruguru

いいにおいのするほうへ
いってみよう

元町ぐるぐる本舗が、空港から一番近いカレー屋さんになって帰ってきました

SOUP & KEEMA
since 1999
グルグルカリー
0138-83-2251
北海道函館市戸倉町34-4

facebook.com/guruguruCurry

NITTSU GAS SUPPORT

日通ガスサポートは
あなたの快適で安心な暮らしを
見守り続けます。

弊社はLPガスや灯油の販売の他、
上下水道の配管工事や一般住宅のリフォームや店舗の施工、
暖房機器や厨房機器の販売も行っています。
お客様の多様なニーズにきめ細かなサービスでお応えいたします。
お困り事やご相談はお気軽にご連絡ください。
専門のスタッフがすぐにお伺いいたします。

日通ガスサポート(株)

北海道亀田郡七飯町字中島208-1　〒041-1133
TEL. 0138-66-3121
FAX. 0138-66-3120　Mail: info@ngs.lolipop.jp

NGS 日通ガスサポート　検索

photograph by Saeru

季刊 @h [アット・エイチ]

vol.50 ／ボラット新装刊
SUMMER 2016

●発行人
池田　誠（HIF）

●編集人
中村ひでのり

●編集スタッフ
齊藤美悠

●デザイン
STUDIO LEAVES

●撮影
saeru

●イラストレーション
滝花保和（表紙）
H.Nakamura（本文）

●サポーター会員（敬称略）
稲泉省／鈴木詔次
松本百合／川上　納
田中眞一／山下淳一

●連載＆編集協力（敬称略）
中川大介
長谷山裕一

●連載（敬称略）
西野鷹志
庄司　証
小宮伸二／押野友美
米田哲平／近藤　緑
夏井俊介／ふくだたくま

●取材協力（敬称略）
藤巻秀樹／田中慶子
河村悦郎／アルーン・ヴァガーイ
アダム・スミス
フョードル・デルカーチ
柳谷瑞恵／朱 妍卉
中野由貴

次号は
2016年9月20日発行です。

2016年夏号（年４回発行）
2016年6月20日発行
（一財）北海道国際交流センター（HIF）
【@h（アット・エイチ）】編集事務局
040-0054　函館市元町14-1
TEL. 0138-22-0770　FAX. 0138-22-0660
E-mail　volut@hif.or.jp　　http://www.hif.or.jp/volut/

禁・無断転載

[@h] 設置場所

【全店配布】ラッキーピエロ/ハセガワストア/郵便局（一部）/生活協同組合コープさっぽろ/みちのく銀行/函館信用金庫/町会会館(一部)/美容室アイズ

【本町・五稜郭付近エリア】函館市芸術ホール/函館市中央図書館/総合保健センター/北海道新聞社(道新文化センター)/函館YWCA/レストランパスク/ワーカーズコープ茜/シネマアイリス/函館市青年センター/北海道教育大学函館校/Colz/Bees.Bee/函館短期大学付設調理製菓専門学校/クラブカットＥ'/おおわき整形外科/喫茶Canvas/夏井珈琲ブリュッケ

【函館駅前付近エリア】函館市役所/工房虹と夢/Pizzeria AMORINO/NHK/千歳図書室/サンリフレ函館/函館駅前バス案内・待合所/函館市総合福祉センター/百閒

【美原・本通・中道・桔梗付近エリア】美原図書室/亀田支所/渡島総合振興局/EIKODO美原店/折谷組/水花月茶寮/ドゥ・アンジュ/花の湯/桔梗配本所(桔梗母と子の家)/LADIGUE/珈琲物語/Pizza and BIANCHI/チッチョパスティッチョ/Cafe en/公立はこだて未来大学/お総菜大地/文教堂桔梗店/三省堂/タイヤ館函館本通店/亀田公民館/わっとな/ファイヤーピット/おしま地域療育センター／函館蔦屋書店 FUSU

【西部地区エリア】北海道国際交流センター(HIF)/Pain屋/ふるる函館/MOSSTREES/金森赤レンガ倉庫/FMいるか/バル・レストラン・ラ・コンチャ/甘味茶房花かんろ/Old Miss 菊/ギャラリー村岡/次郎うどん/カフェやまじょう/ロシア極東連邦総合大学函館校/Cafeteria Morie/ハルジョオン・ヒメジョオン/函館市女性センター/はこだて工芸舎/函館市公民館/函館市地域交流まちづくりセンター/ROMANTiCO ROMANTiCA /Select Coffee Shop Peacepiece/Organic & Healing Cafe COCOLO/和雑貨いろは/カフェ三日月/TACHIKAWA CAFE Restaurant Maison/Cafe & Deli MARUSEN/函館圏フリースクールすまいる/パザール・バザール/Cafe Classic/マーキーズカフェ/箱館元町珈琲店

【五稜郭駅・昭和エリア】Beauty Concierge AOKI/こじまキッズクリニック/港図書室/タマツ電機/北海道大学水産学部/函館市亀田青少年会館/Seak

【山の手・湯の川・旭岡付近エリア】旭岡図書室/銭亀沢支所/函館市民会館/湯川支所/湯川図書室/函館大学/函館短期大学/函館工業高等専門学校/山の手温泉/花園温泉

【北斗市エリア】北斗市役所/かなで～る/LEAVES/しんわの湯/北斗市スポーツセンター/北斗市公民館/久根別住民センター　く～みん/七重浜住民センター　れいんぼー/Coing

【七飯・大沼エリア】加藤栄好堂/こなひき小屋/ななえ天然温泉ゆうひの館/七飯町文化センター/大中山コモン/ドゥ・エ・タンドゥル洋菓子店・マルス店/レストランピノ/宮崎鯉屋/南北海道大沼婦人会館/カントリーキッチンWALD/大沼国際交流プラザ/ネイパル森/Studio Lumier/七飯町役場/大沼国際セミナーハウス

いろんなこと、募集しています!

●[@h]はおおぜいの方々のボランティアによって支えられています。安定した運営のため、広告の掲載、または協賛してくださる方（サポーター会員）を募集しております。年会費は一口、団体／￥10000、個人／￥3000です。みなさんのご理解とご協力、よろしくお願いします。なお、広告の掲載料につきましては事務局までお問合せください。

●編集部では読者のみなさまからのご意見・ご感想、さまざまな情報をお待ちしております。お気軽にお寄せください。ご協力よろしくお願いします。

【@h編集事務局】
TEL. 0138-22-0770　FAX. 0138-22-0660
E-mail　volut@hif.or.jp　http://www.hif.or.jp/volut/